

スコティッシュ・トラベラーと「生きている伝承」 (Scottish Travellers and “Living Tradition”)

山崎 遼 (Ryo YAMASAKI)

Abstract

This article presents (1) a review of the Scottish Traveller studies and ballad studies through an article by a folklorist, Thomas McKean, (2) an explanation to its keywords, (3) an evaluation of his study in relation to the development of folksong studies, and (4) a suggestion for further improvement. I first provide an overview of McKean’s article, “Singing Families of Aberdeenshire,” and give an explanation on its three basic keywords, namely “Aberdeenshire,” “ballads,” and “Travellers.” After that, I place McKean’s study in the development of Scottish Traveller studies and ballad studies. I argue that his study is on the line of tradition bearer studies and performance theories in folkloristics, both of which arose after the death of blind belief in ballad anonymity. I conclude that McKean’s study is a nearly all-inclusive ethnography full of individual singers’ emic perspectives although it can still be improved through more thorough interpretation of song texts.

Keywords : Scottish travelling people, ballad studies, oral tradition, ethnomusicology

0. はじめに

伝承を「生きている伝承」と「死んだ伝承」に二分するとすれば、現在スコットランドのトラベラーの伝承は残念ながら生死の境に位置していると言えるであろう。1950年代以降に起こったトラベラーの定住化に伴い、今やかつての漂泊生活を知る世代は少なくなってきている。ここ数年だけを見ても、2009年にスタンリー・ロバートソンが亡くなり、2013年にはジェーン・タリフが、2014年にはシーラ・スチュアートがこの世を去った。実際の漂泊生活を知る世代のトラベラーで存命かつ口頭伝承を継承し披露している人物は、エリザベス・スチュアートやジェス・スミスなど、今となっては極少数に限られる。非トラベラーの女性と結婚したスタンリー・ロバートソンの息子であり、自らを「[家族伝承の担い手の]最後の一人」(“the end of the line [of the family tradition]”) (EI2012.052) と称するアンソニー・ロバートソンは、2009年の父の死後初めて口頭伝承の重要性に気付いたという。その後、彼は自らストーリーテラー兼シンガーとなり、父をはじめとするトラベラー文化の継承・発信に努めている。彼のおかげでトラベラーの家庭内伝承は命をつないだと言えるかもしれない。しかしながら、アンソニーが口頭伝承の価値に気付いてそれらを引き継いだという経緯は、トラベラーの歌や物語が「生きた伝承」から「生かされている伝承」へと変化した象徴的な出来事のように思われる。漂泊

生活の終焉とそれに伴う定住民族との結婚の一般化、社会的差別とアイデンティティ・クライシス、またテレビやインターネットなどエンターテインメントの多様な理由により、トラベラーの純粋な家庭内伝承はその命を失いつつある。

そうしたトラベラー文化の記録、研究、発信に尽力しているのが、英国スコットランドのアバディーン大学エルフィンストーン研究所である。本研究所は、民族学、フォークロア研究、民族音楽学の研究機関であり、1995年に大学創立500周年を記念して設立された。同分野においては、スコットランドでエディンバラ大学に次ぐ規模を誇る研究機関である。「生きている伝承」の近くに位置するという大きな強みを活かし、本研究所ではフィールドワークに基づいた手法でアバディーンシャーにおける伝承の「今の姿」を克明に記録し続けている。2000年代に入ってからというもの、本研究所からはトラベラー関係の書籍やCDがめざましいペースで出版されている。また2002年から2005年にかけて、本研究所ではスタンリー・ロバートソンがトラベラーの文化や伝承を記録するプロジェクトに従事し、多くの音声資料を残している（後述）。また本研究所は一般向けの講義やセミナー、ワークショップも頻繁に開催しており、学界の外との交流およびトラベラー文化の発信にも非常に熱心である。所長であるトーマス・マケイン教授（Dr. Thomas A. McKean）は、現在フィールドワークを主体としたフォークロア研究、特に伝承歌研究の分野での主導的な研究者である。本誌に掲載されている「アバディーンシャーの歌い手たち」(“Singing Families of Aberdeenshire”)は、トラベラーとその歌の研究に長年携わってきたマケイン氏による、トラベラーとその歌の伝承に関する研究である。

本稿の論点は以下の4点である。(1) マケイン氏の研究の要約、(2) 論文中で触れられた論点への補足説明、(3) 学問的背景と位置づけの解説、そして(4) 批評である。第1章の要約では、マケイン氏の研究においてトラベラーの生活における歌の意味・役割、家族内伝承のプロセス、個々人の伝承と向き合う姿勢や葛藤などが詳細に検討されていることを紹介する。つづく第2章では論点への補足説明を行う。ここでは主にキーワードである「アバディーンシャー」、「バラッド」、「トラベラー」について解説を行い、マケイン氏の論文において最大の論点となっている「トラベラー」に関しては特に詳細な説明を加える。第3章ではマケイン氏の研究の学問的背景と位置づけに関する解説を加える。この章ではフォークロア研究において歌い手に注目が集まってきた過程を描き出す。最後の第4章ではマケイン氏の研究への批評を行い、主にテキスト分析に関して更なる検討を必要とする点を指摘する。

1. マケイン氏の論文要約

論文においてマケイン氏は「歌い手たち」に着眼しつつ、スコットランドのアバディーンシャーにおけるトラベラーと彼らのバラッド伝承について紹介している。その中で、誰が、なぜバラッドを歌うのか、歌い手や彼らの生活にとってバラッドが持つ意味・役割とは何か、といった点がマケイン氏の研究の主題である。マケイン氏の研究はトラベラーという集団を扱いつつもその中の一人一人に光を当てて論じている点が特徴的であり、複数の伝承者をそれぞれ丁寧に論じた包括的なトラベラー民族誌であった。ここからはマケイン氏の論文の内容を簡単に振り返る。

論文は基本的な3つのキーワードである「アバディーンシャー」、「バラッド」、「トラベラー」

の紹介から始まる。まずスコットランド北東部に位置するアバディーンシャーは今なお口頭伝承が息づく土地であることが紹介される。またバラッドとは「物語を語る歌 (“a song that tells a story”）」であると氏の論文では定義づけられている。次にマケイン氏はこうしたバラッドを現在も伝承するトラベラーと呼ばれる人々の紹介に移る。彼らトラベラーは半漂泊生活を送ってきた歴史があり、彼らに対する社会的差別は現在も大きな問題としてスコットランドに残っているとマケイン氏は説明する。

その後マケイン氏はアバディーンシャーに住むトラベラーの家族を4つ紹介する。(1) プレアのスクウェアート家、(2) ロバートソン・ヒギンズ家、(3) フェタランガスのスクウェアート家、(4) (もうひとつの) フェタランガスのスクウェアート家である。4つの家族はすべて親類関係である。1950年代に彼らは伝承の継承者としてハイミッシュ・ヘンダスン (Hamish Henderson, 1919-2002) から研究者に「発見」され、以降スコットランド研究やフォークロア研究のみならず、当時の第二次英国フォークリバイバルの中でも大きな役割を果たすこととなる。マケイン氏はこうした流れを、伝承者の家系やその中の一人一人に焦点を当てながら鮮明に描き出してみせた。

こうして豊かな口頭伝承に恵まれたトラベラーたちであるが、彼らの歴史や現状は社会的差別にあふれており、そうした苦境の体験がバラッドに要約されていることをマケイン氏は最後に示した。このようにトラベラーが伝承を生きている状態で受け継いできたおかげで、われわれは歌や物語といった伝承の意義や価値を知ることができる、という主張をもってマケイン氏は論文を締めくくっている。

2. キーワードの解説

ここまでマケイン氏の論文内容を俯瞰してきたが、ここからは参考となりうる文献に言及しながら、主に3つのキーワードに対する解説や補足説明を行いたい。

第一のキーワード「アバディーンシャー」はスコットランド北東部の州で、かつては農業・漁業で栄えていたが、現在は北海油田の石油産業を主要産業としている。このアバディーンシャーはスコットランドのボーダー地方と並んでバラッド伝承で有名な地域である。ボーダー地方は古くより争いの絶えなかったイングランドとスコットランドの国境地域であるが、アバディーンシャーもハイランドとローランドの境界に位置しており、ボーダー地方と同じく異なる文化圏の境界に位置していることが見て取れる。Paredes (“With His Pistol,” “A Texas-Mexican Cancionero”) の研究などからも明らかなように、アメリカとメキシコの国境地帯にもスパニッシュ・バラッド (スペイン語で “corrido”) が多く残されていたことを考慮すると、国境という政治的に不安定な土地柄がバラッド文化を醸成する一つの条件になっていることは十分考えられる¹⁾。マケイン氏が述べたように Francis James Child 編 “The English and Scottish Popular Ballads” に収められたバラッドのうち三分の二がアバディーン州で収集されたものである。また全巻入手は困難であるものの、アバディーン州を含むスコットランド北東部のバラッドなどが Shuldham-Shaw and Lyle 編 “The Greig-Duncan Folk Song Collection” としてまとめられている。こうした歌のコレクションが豊富に存在することからも、アバディーン州がいかに歌の伝承に恵まれているかが見て取れる。

次に2つめのキーワードである「バラッド」に関して少々説明を加える。バラッドに関しては様々な定義がなされてきたが、現在ではマケイン氏の定義するように「物語を語る歌」とするのが通例である。事実、歌の中で物語を語るという点がバラッドの最大の特徴の一つとなっている。この場合の対義語は、個人の心情の吐露などに重点を置く「叙情歌 (lyric)」となる。バラッドには伝承バラッドの他に、ブロードサイド・バラッド (“broadside ballad”) やバラッド詩 (“literary ballad”) と呼ばれるカテゴリが存在するが、マケイン氏の研究では伝承バラッドのみが扱われた。起こった事柄を列挙するだけのきわめて簡素な語りと、登場人物の会話によって進行する伝承バラッドの物語は、そのモーダルで質素な曲調と相まって独特の雰囲気醸している²⁾。事実だけを淡々と述べる語りによって生み出される解釈の多義性をマケイン氏は「バラッド的曖昧さ」と呼んだが、これは優れた詩や小説などの文学作品にも共通する特質である。伝承バラッドは、イギリス・ロマン主義期における文学界、および第2次大戦後の第2次英国フォークリバイバルにおけるポピュラー音楽界に特に大きな影響を与えた³⁾。

3つめのキーワードは「トラベラー」である。様々な差別的呼称が存在し、同じく漂泊民であるジプシーと混同されることもあるが、現在英国においては彼らをトラベラー (“Travellers” または “the travelling people”) と称することが最も差別的でないとされている。彼らは独自の生活様式、習慣、迷信、伝承などを持っており、こうした要素が彼らのアイデンティティを形成していると考えられる⁴⁾。おおよそ11月から3月の冬の間、トラベラーは街の家で暮らしていた。そしてエニシダが黄色い花を咲かせ始めたのを確認すると荷物をまとめて旅立ち、農場などで季節労働に従事した⁵⁾。彼らの主な収入源はこうした季節労働に加え、ブリキなどの金属細工や音楽の興行であった (Douglas 223)。彼らが時折ティンカー (“tinker”。 “tin” はブリキの意) と呼ばれるのはこうした背景に由来する。また、マケイン氏の研究が扱ったのはトラベラーのバラッドのみであったが、彼らの伝承の中には散文の物語も数多く含まれていることを忘れてはならない⁶⁾。特にストーリーテリングの達人であったスタンリー・ロバートソン (Stanley Robertson, 1940-2009) の業績は注目すべきもので、彼はトラベラーの語る伝承の物語や、仕事場であった魚市場での体験、また自ら創造した物語を1988-2009年の間に7冊の本として出版している。

トラベラーは冬になると仕事がなくなるため街の家で暮らしたが、街で受けた扱いは酷いものであった。例えばスタンリー・ロバートソン (“Elphinstone Lecture” 2005) は当時を回想し、トラベラーの子として学校に通うことは「まさにこの世の地獄」 (“pure hell upon earth”) であったと述べている。トラベラーは教育に値しないと考えられていたため彼は教諭から本を与えられず、視覚・聴覚障害者らと一緒に窓のない特別支援学級に入れられた。アバディーンストーリーテリング団体 The Grampian Association of Storytellers (略称 GAS) の創始者の一人であり、ロバートソンと親しかった Banks によると、彼の一家が住んでいた町内は、トラベラーであるという理由だけで一家に町内から出て行くよう投票で決議を行ったこともあった。そうした差別や偏見があったため、ロバートソンは毎日学校から家まで走って帰らねばならなかったそうである。同じくトラベラーのエリザベス・スチュアート (Elizabeth Stewart, 1939-) も幼少期の担任教諭のことを思い出し、「あの先生はあらゆる方法で、私たち [トラベラー] が異なる存在であることを認識づけた」 (“she did everythin tae mak us feel different”) (224-25) と語っている。

こうした教員や生徒からの差別やいじめはトラベラーの間でアイデンティティの危機をもたらし、多くのトラベラーが学校や社会に馴染むために自身のバックグラウンドを隠そうとした (S. Robertson, “Scottish Travelling People” 316, E. Stewart 225)。大変残念なことではあるが、こうしたトラベラーに対する社会的差別は現在も根強く残っている。

こうした偏見や差別の結果発達したのがカント (“cant”) である。カントはトラベラーが仲間内で使う独自の仲間言葉 (cover / secret language) である⁷⁾。カントはトラベラーの歌や物語の中でも散見され、マケイン氏の研究で紹介された歌にもいくつか含まれている。エリザベス・スチュアートは「トラベラーでない人に私たちの言葉 [カント] は絶対に教えないわ。それは良くないことなの。カントは秘密にしておくべきものなのよ」 (“I would niver teach the scaldies oor language. It’s wrong tae dee that. The language should be kept very secretive.”) (E. Stewart 256; emphasis in original) と述べている。彼女はここで「トラベラーでない人」を指して “scaldies” という語を用いているが、この語もカントの一例である (Braid 234, S. Robertson, “Scottish Travelling People” 319)⁸⁾。スタンリー・ロバートソンは祖父がイングランドのジプシーであったため、カントとドリック⁹⁾に加えてロマニー語を話すこともできた (“Elphinstone Lecture” 2005)。彼によると、1950年代以降、カントは若いトラベラーの間で時代遅れと見なされることが多くなり、多くの語彙が失われていくこととなった (S. Robertson, “Scottish Travelling People” 319)。この時代はトラベラーが定住しはじめた時期でもあり、カント離れはトラベラーのバックグラウンドを隠して定住民族の社会に溶け込むためでもあった (Whyte, “The Yellow” 187)。

このように偏見に満ちた目で差別的待遇を受けてきたトラベラーであるが、彼らの伝承を発見し、その地位を大幅に高めることに貢献した人物がヘイミッシュ・ヘンダスンである。彼をはじめとするフィールドワーカーは、トラベラーが受け継いできた歌、物語、およびそれらにまつわる談話を精力的に収集した。それらの録音は現在エディンバラ大学のアーカイブ Tobar an Dualchais (Kist o Riches) に収められており、一部がオンライン化されている。また比較的最近 (2000年代前後から) のトラベラーの資料は、マケイン氏が所長を務めるアバディーン大学エルフィンストーン研究所のアーカイブに多数所蔵されている (オンライン化は未定)。本研究所はスタンリー・ロバートソンが2002年から2005年の三年間にわたって Heritage Lottery Fund による支援を受けてプロジェクトに従事した場所である。これはスコットランド北東部トラベラーの口承文化を記録・保存するためのものであった。このプロジェクトに関して研究所前所長のイアン・ラッセル名誉教授 (Dr. Ian Russell) は、本プロジェクトは主に若者に向けたものであり、若者がトラベラーへの偏見を取り除き、トラベラーのポジティブな一面を見てくれるよう望んだと述べている (qtd. in S. Robertson, “Elphinstone Lecture”)。こうした研究者たちの尽力によって、トラベラーを差別の対象としてではなく「伝承の守護者」 (“guardian of tradition,” “keeper of the lore”) として位置づける動きが広まってきている。

3. 学問的背景と位置づけ

続いてマケイン氏の研究の学問的背景と位置づけについて簡単に説明を加える。氏の研究の

学問的な基盤は、フォークロア研究の中でも比較的新しい分野にあたる「伝承者研究」である。フォークロア研究において伝承者はしばしば“tradition bearer”（「伝承の担い手」）と呼ばれる。伝承者の研究は、ホメロス研究者 Parry による 1920 年代から 30 年代の口承定型句理論（“oral-formulaic theory”）研究に端を発すると言って差し支えないであろう¹⁰⁾。彼は、詩人でありパフォーマーであるホメロスがどのようにして長大な詩を口頭で生み出していたかを明らかにしようと試みた。緻密なテキスト分析の結果、ホメロスは無から詩を創造していたのではなく、大量の定型句を記憶しており、実際はそれを組み合わせることで詩を生み出していたことを Parry は解明した。のちに彼はユーゴスラビアでフィールドワークを行い、現地の口承叙事詩の歌い手について研究を行った。この口承定型句理論の研究を引き継いだ Lord は 1960 年に古典的著作 “The Singer of Tales” を著し、これに伴って伝承者やパフォーマンスにまつわる研究は 1960 年代から 70 年代にかけて大きく盛り上がることとなった。これ以降、伝承者研究やパフォーマンス理論はフォークロア研究における中心的な方法論として現在に至るまで機能してきている。

バラッド研究はフォークロア研究の中でも最も古いジャンルのひとつであるが、1978 年に Burton (ix) も指摘したように、シンガーを中心に据えた著作は意外なことに少なかった。それは、「集団的作者」を持つバラッドの匿名性（“anonymity”）が一種の特性として前向きに捉えられてきたことに起因すると考えられる。例えば Child は “Johnson’s New Universal Cyclopaedia” の “ballad poetry” の項に以下のように書いている。「[バラッドの]作者は考慮に値しない。（中略）作者不詳として伝承されてきているからだ」 (... the author [of the ballad] counts for nothing ... [because] they have come down to us anonymous.) (“Johnson’s” 365)。同じく Sargent and Kittredge はバラッドを定義づける際、その特徴を次のように述べている。「バラッドに作者はいない。いずれにしても、いないように見受けられる。（中略）バラッドにおいて、作者は考慮に値しない。そこに存在すらしていない。かつて存在したかすらも定かではない」 (*A ballad has no author. At all events, it appears to have none. . . . In the ballad . . . the author is of no account. He is not even present. We do not feel sure that he ever existed.*) (Sargent and Kittredge xi; emphasis added)。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての「バラッドに作者はいない」とするこうした主張は、当時の研究者が持っていた匿名性に対する見解を明確に示している。

1950 年代のトラベラー伝承の「発見」と、1960 年以降の伝承者研究・パフォーマンス理論の隆盛によって、バラッドの伝承者は大きく光を当てられることとなった。筆者の知る限り、歌い手を扱った最初期の研究書はアメリカのバラッドシンガー Almeda Riddle 本人による “A Singer and Her Songs” である。1970 年に出版された本書は、歌い手自身のイーミックな視点をふんだんに盛り込んだ革新的な書であった。まとまったスコットランドの歌い手研究となると、ジーニー・ロバートソン (Jeannie Robertson, 1908-75) を論じた 1995 年出版の Porter and Gower を待たねばならない。しかしながら、1970 年代からトラベラー自身による自伝や伝記は断続的に出版されており、21 世紀に入ってからの出版のペースは目覚ましいものがある¹¹⁾。こうした近年の出版事情から、最近になって歌い手など伝承者への関心が一際高まりを見せていると捉えるべきであろう。

マケイン氏の研究は、こうした伝承者研究の系譜上に位置している。バラッドの「生きた伝承」

が絶滅危惧種となってしまった今、「生きた伝承者」であるアバディーン州のトラベラーの存在とその研究がいかに重要であるかは明白である。氏の研究は、1950年代から現在に至るまでのトラベラーの歴史を一人一人に焦点を当てつつ俯瞰し、そして“non-travellers”である研究者やリバイバル・シンガー達との交流を分析したものである。部外者では到底知りえなかった情報がいくつも散りばめられており、トラベラーたちと築き上げてきた信頼関係の上に成り立つ貴重な研究であることは言うまでもない。

論文の終盤でマケイン氏が言及した、文字文化と口承文化の関係についても少々説明を加えておく。フォークロア研究において二者の関係はしばしば議論的となってきた。氏も述べたように、文字文化と口承文化（たとえば文学と口頭伝承）は全くの別物だという言説があり、両者の共通点よりもむしろその相違点に注目した研究が行われてきた。例えば Ong は文字文化と声の文化における思考・表現の相違点を探求し、文字文化が人間の思考プロセスをいかに変化させるかを論じている。近年は、文字文化と口承文化の間に違いはあれども、Finnegan が「大陸分水界」(“Great Divide”) (12-14) と呼んだ深い谷間は両者の間に存在しないとする考え方が一般的である。「読み書きの能力というのは歌詞の質や完全性と大いに関係していますが、歌自体の質にはほとんど関係ないのです」(literacy has much to do with the quality and fullness of a text, but very little to do with the quality of a song) (McKean; emphasis in original) というマケイン氏の言葉からも察せられる通り、氏も論文でこの立場をとっている。マケイン氏はさらに一歩踏み込み、文字と口承の文化は常に混ざり合うものであって、それが伝承に新たな力を付与しているのだと説明している。

4. 批評

マケイン氏の研究は、トラベラーと彼らの歌にまつわる貴重な情報が盛り込まれた優れたエスノグラフィーであることは間違いない。しかしながら、検討を要すると考えられる点が二つ存在する。一点目は、トラベラー個人の人物像を踏まえた歌詞の解釈が存在しない点である。マケイン氏は歌手の一人一人に密着し、彼らの生き方や、生活における歌の役割、伝承に対する異なる姿勢などを詳細に描き出しており、それが氏の研究のハイライトであると言える。ところが、バラッドの歌詞を読み解く段になると、歌手を「トラベラー」と一般化して論じる傾向が見受けられる。確かにトラベラーという集団に共通する経験や体験などは存在するであろう。社会的な差別を受けてきた集団であれば尚更である。しかし、歌手はその集団の単なる代弁者ではない。歌手はその集団の伝承の形成を担っている一人のアーティストなのである。彼らを集団の代表者と見なして「トラベラー」という一種の集団的作者を想定してしまうことは、実際にその伝承が人々の生活とどのように関わっているのかを見逃してしまうことに繋がる。マケイン氏の丁寧に論じてきたトラベラー一人一人の性格や趣向、また伝承との向き合い方や葛藤が歌のテキストにどう表れているかが詳細に論じられれば、人と歌や人と伝承の関わりが一層明確に見えてくるのではないだろうか。

二点目も同じく歌詞に関連することであるが、バラッドの歌詞の分析が言語的構造とレトリックの簡単な紹介に留まっており、それらの断片的な特徴が歌という完成品に及ぼす影響が本研

究では十分に論じられていない。論文においてマケイン氏は、二つのバラッド“Barbara Allan” (Child 84, Roud 54) と “Gypsy Laddies” (Child 200, Roud 1) の歌詞を用いてバラッドの歌詞のもつ構造や形式を論じている。しかし、歌の歌詞を分析・解釈するのであれば、そうしたバラッド特有の言葉づかいや形式といった独特の様式が、その歌全体の意味にどのように影響を与え、その結果その歌にどのような解釈が可能となるか、といった次元まで論じられるべきであろう。マケイン氏は冒頭で「バラッドは歌い手にとってどのような意味を持っているのか」、「彼らの生活の中で歌がどのような役割を担っているのか」という点をこの研究の主題の一部として掲げた。そしてマケイン氏はこれに答える形で、トラベラー自身の観点による歌の意味・役割を提示した。こうした内部者による視点を掬い上げた点で氏の研究は模範的なエスノグラフィーと言えるが、このアプローチに加えてバラッドの言語的特徴と歌全体の有機的な関係を扱うことができれば、本研究にエティックな解釈が加わり、その主題に別の方向からも光を当てることができると考えられる。

筆者はかつて Kittredge や Wilgus が述べたように、「テキストが全て」 (“The text is the thing.”) (qtd. in Wilgus 244) などと言うつもりは毛頭ない。歌詞などのテキストは分析対象の全てではなく、あくまで一部であるとした Toelkin (33) の主張に全面的に賛成である。しかしながら、バラッドをはじめとする口頭伝承においてはテキストが最も基本的な構成要素のひとつであり、同時にきわめて重要な分析対象であることに変わりはない。そのためマケイン氏の研究のみならず、広くフォークロア研究や民族音楽学においても、一語一語に密着したテキストの丁寧な解釈が行われるようになることを期待したい。

5. おわりに

本稿では、フォークロア研究者マケイン氏の紹介したアバディーン州のトラベラーとそのバラッド伝承の研究を振り返り、トラベラー研究およびバラッド研究の歴史や、当該論文の位置づけと問題点を検討してきた。解説では、まず3つのキーワードである「アバディーン州」、「バラッド」、「トラベラー」について説明を加えた。特に、マケイン氏の論文における最大の論点である「トラベラー」に関しては、彼らの呼称、独自の生活様式、社会的差別、そして外界との関わりなど重点的に解説を行った。次に本稿はマケイン氏の論文の学問的背景と位置づけについて言及した。20世紀前半に至るまでバラッドはその匿名性が尊重されてきたが、20世紀前半から中盤に口承定型句理論が、それに続いて伝承者研究およびパフォーマンス理論が発達した。それに伴って歌い手個人が一人のアーティストとして認識されるに至り、その立場を大幅に向上させてきた過程を本稿は描き出した。そして本稿はマケイン氏の研究がその「伝承者研究」の系譜上にあると位置づけた。同時に、近年の出版物の傾向からトラベラーへの興味・関心が高まりつつあることを指摘し、彼らの消えゆく文化遺産を記録し分析する貴重な研究であることを論じた。そして最後に、本稿はマケイン氏の研究において更なる検討を必要とする箇所を二点指摘した。一点目は、伝承バラッドの歌詞解釈を試みる際に「トラベラー」という集団を作者と想定しており、伝承者一人一人の視点が省かれてしまっている点であった。二点目は、バラッドの言語的・構造的特徴の分析が断片的な議論に終始しており、そうしたレトリックが

その歌の全体に及ぼす影響を十分に論じ切れていない点であった。

歌詞解釈に若干の消化不良が残るとはいえ、マケイン氏の論文はきわめて包括的であり、同時に学際的な研究である。スコットランドのアバディーンシャーという土地に着目した点で地域研究的であり、トラベラーという社会集団を扱った点で社会学的・歴史学的である。そしてバラッドの歌い手やその共同体を丁寧に論じた点でフォークロア研究的・民族音楽学的であり、その歌詞の解釈を試みた点で文学研究的でもある。さらに、マケイン氏はフォークロア研究で重視されがちなイーミックな視点のみではなく、自身の研究者としてのエティックな視点も取り入れて伝承プロセスなどを分析・解釈している。また紙面の都合上立ち入らなかったが、マケイン氏は伝承の真正性 (authenticity) や研究倫理 (ethics) といった問題にも触れている。このように多様な学問分野や異なる立場の見方を持ち、研究対象に密着した氏の研究は、トラベラー研究や伝承バラッド研究の強固な基盤となるに留まらず、今世紀の口頭伝承研究が向かう方向をも示唆しているように思われる。

2016年2月中旬、筆者はマケイン氏に連れられてトラベラーの歌い手であるエリザベス・スチュアートの元を訪れた¹²⁾。その際マケイン氏とエリザベスが交わした言葉や表情から、筆者は両者が長年培ってきた信頼関係を何度も垣間見ることができた。マケイン氏のようにトラベラーと素晴らしい関係を築き、彼ら一人一人やトラベラーの文化・習慣を熟知する研究者が存在することは、トラベラーたちにとっても非常に心強いことであろう。マケイン氏のような研究者がトラベラーの文化や伝承を記録・保存し、それらを広く社会に発信することで、未だトラベラーへ向けられている心ない偏見や差別の目が消えゆくことを望んで止まない。同時に、口頭伝承の多くを失ってしまった(少なくとも失ってきている)現代社会に生きる多くの人々も、トラベラーが脈々と受け継いできた歌や物語から伝承の価値を再発見し、そこから生きるための知恵などを学ぶこともできるであろう。マケイン氏のこの研究は、トラベラー文化の一部を紹介し分析しただけでなく、これからの国際社会におけるマジョリティとマイノリティの関わり方や伝承の意味・役割などといった事柄を我々に提示してくれる大変意義深いものであると言える。

注

- 1) アメリカ・メキシコ国境およびメキシコのスペイン語バラッド研究は、Paredes (“With His Pistol,” “A Texas-Mexican Cancionero”) と McDowell (“Poetry,” “¡Corrido!”) 参照。特に McDowell の研究するメキシコのバラッドは、スコットランドのアバディーンシャーのバラッドと並ぶ貴重な「生きた伝承」である。
- 2) マケイン氏は論文で伝承バラッドの特徴や構造・形式に関して簡単な言及をするに留まったが、これらは山中に詳しい。
- 3) バラッドと文学に関しては Yamanaka 参照。バラッドとポピュラー音楽に関しては Sweers 参照。
- 4) トラベラーの歴史、アイデンティティ、生活習慣、カント(後述)、信仰・迷信などの概要については S. Robertson (“Scottish Travelling People”) 参照。
- 5) 半漂泊生活を送るトラベラーの数は、1950年代から60年代を境に激減した (A. Robertson)。かつてのトラベラーの生活については、トラベラーたちが出版している自伝・伝記が参考となりうる。例えば Whyte (“Red Rowans,” “The Yellow”), Smith, S. Stewart (“Queen,” “A Traveller’s Life”), E. Stewart など。
- 6) トラベラーの散文の物語については Braid や S. Stewart (“Pilgrims”), Smith (“Sookin”) 参照。

- 7) 基本的なカントの語彙や用法については S. Robertson, "Scottish Travelling People" 319 および Whyte, "The Yellow", 188-97 参照。
- 8) 多くの場合, "the scaldies" という語は「トラベラーを差別する人々」というネガティブなニュアンスを含んでいる。
- 9) ドリック (Doric) はスコットランド北東部で話されるスコッツ語の方言である。
- 10) バラッド研究においても, Buchan や Andersen などの研究に口承定型句理論の応用が見られる。
- 11) 注5 参照。
- 12) 彼女の自宅は, 自身のレパートリーであるバラッドにちなんで「ビノリー」("Binnorrie") と名付けられている。"Binnorrie" はバラッド "The Twa Sisters" (Child 10, Roud 8) の別称である。

参考文献

- Andersen, Flemming G. *Commonplace and Creativity*. Odense: UP of Southern Denmark, 1985. Print.
- Banks, Grace. Interview by James Jones. Elphinstone Institute Archives. EI2013.065. 13 Jun. 2013.
- Braid, Donald. *Scottish Traveller Tales: Lives Shaped through Stories*. Jackson: UP of Mississippi. 2002. Print.
- Burton, Thomas G. Foreword. *Some Ballad Folks*. By Burton. 1978. Boone: Appalachian Consortium Press, 1981. Print.
- Buchan, David. *The Ballad and the Folk*. London: Routledge, 1972. Print.
- Child, Francis James. "Ballad Poetry." *Johnson's New Universal Cyclopaedia: A Scientific and Popular Treasury of Useful Knowledge*. 1879: 365-68. *Google Books*. Web. 18 Feb. 2016.
- , ed. *The English and Scottish Popular Ballads*. Dover ed. 5 vols. 1965. New York: Cooper Square, 2003. Print.
- Douglas, Sheila, ed. *The Sang's the Thing: Voices from Lowland Scotland*. Edinburgh: Polygon, 1992. Print.
- Finnegan, Ruth. *Literacy and Orality: Studies in the Technology of Communication*. Oxford: Blackwell, 1988. Print.
- Lord, Albert B., *The Singer of Tales*. 2nd ed. Eds. Stephen Mitchell and Gregory Nagy. Cambridge: Harvard UP, 2000. Print.
- McDowell, John Holmes. *¡Corrido! The Living Ballad of Mexico's Western Coast*. Albuquerque: U of New Mexico P, 2015. Print.
- . *Poetry and Violence: The Ballad Tradition of Mexico's Costa Chica*. Urbana: U of Illinois P, 2000. Print.
- Ong, Walter J. *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. 2002 ed. London: Routledge, 2002. Print.
- Paredes, Américo. *With His Pistol in His Hand: A Border Ballad and Its Hero*. Austin: U of Texas P, 1958. Print.
- . *A Texas-Mexican Cancionero: Folksongs of the Lower Border*. Austin: U of Texas P, 1976. Print.
- Parry, Milman. *The Making of Homeric Verse: The Collected Papers of Milman Parry*. Ed. Adam Parry. Oxford: Clarendon, 1971. Print.
- Porter, James, and Herschel Gower. *Jeannie Robertson: Emergent Singer, Transformative Voice*. Knoxville: U of Tennessee P, 1995. Print.
- Riddle, Almeda. *A Singer and Her Songs: Almeda Riddle's Book of Ballads*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1970. Print.
- Rieuwerts, Sigrid, ed. *The Ballad Repertoire of Anna Gordon, Mrs. Brown of Falkland*.
- Ritchie, Jean. *Singing Family of the Cumberlands*. 1955. Port Washington: Geordie Music, 1980. Print.
- Robertson, Stanley. "Elphinstone Lecture." Aberdeen University. Marischal College, Aberdeen. 26 Apr. 2005. Lecture. Elphinstone Institute Archives. EI2005.040.
- . *Exodus to Alford*. Nairn: Balnain, 1988. Print.

- . *Fish-Hooses: Tales from an Aberdeen Filleter*. Nairn: Balnain, 1990. Print.
- . *Fish-Hooses 2: More Tales from an Aberdeen Filleter*. Nairn: Balnain, 1991. Print.
- . *Ghosties and Ghoulies*. Nairn: Balnain, 1994. Print.
- . *The Land of No Death*. Nairn: Balnain, 1993. Print.
- . *Nyakims's Windows*. Nairn: Balnain, 1989. Print.
- . *Reek Roon a Camp Fire: A Collection of Ancient Tales*. Edinburgh: Birlinn, 2009. Print.
- . "Scottish Travelling People." *The Individual and Community Life*. Ed. John Beech, Owen Hand, Mark A Mulhern, and Jeremy Weston. Edinburgh: John Donald, 2005. 313-28. Print.
- Robertson, Anthony. Interview by Wibke Reimer. Elphinstone Institute Archives. EI2012.052. 5 Sept. 2012.
- Sargent, Helen Child, and George Lyman Kittredge. Introduction. *The English and Scottish Popular Ballads*. By Francis James Child. 1882-98. Eds. Helen Child Sargent and George Lyman Kittredge. Boston: Houghton Mifflin, 1904. *HathiTrust*. Web. 11 Feb. 2016.
- Shuldham-Shaw, Pat, and Emily B. Lyle, eds. *The Greig-Duncan Folk Song Collection*. 8 vols. Aberdeen: Aberdeen UP, 1981-2002. Print.
- Smith, Jess. *Jessie's Journey*. Edinburgh: Birlinn, 2008. Print.
- . *Sookin' Berries: Tales of Scottish Travellers*. Edinburgh: Birlinn, 2008. Print.
- . *Tales from the Tent*. Edinburgh: Birlinn, 2012. Print.
- . *Tears for a Tinker*. Edinburgh: Birlinn, 2012. Print.
- . *Way of the Wanderers*. Edinburgh: Birlinn, 2012. Print.
- Stewart, Elizabeth. *Up Yon Wide and Lonely Glen: Travellers' Songs, Stories and Tunes of the Fetterangus Stewarts*. Ed. Alison McMorland. Jackson: UP of Mississippi, 2012. Print.
- Stewart, Sheila. *Pilgrims of the Mist: The Stories of Scotland's Travelling People*. Edinburgh: Birlinn, 2008. Print.
- . *Queen Among the Heather: The Life of Belle Stewart*. Edinburgh: Birlinn, 2006. Print.
- . *A Traveller's Life*. Edinburgh: Birlinn, 2011.
- Sweers, Britta. *Electric Folk: The Changing Face of English Traditional Music*. Oxford: Oxford UP, 2005. Print.
- Toelken, Barre. *Morning Dew and Roses: Nuance, Metaphor, and Meaning in Folksongs*. Urbana: U of Illinois P, 1995. Print.
- Whyte, Betsy. *Red Rowans and Wild Honey*. 1990. Edinburgh: Birlinn, 2000. Print.
- . *The Yellow on the Broom: The Early Days of a Traveller Woman*. 1974. Edinburgh: Birlinn, 2001. Print.
- Wilgus, D. K. "The Text Is the Thing." *The Journal of American Folklore* 86.341 (1973): 241-52. Web. 10 Oct. 2015.
- Yamanaka, Mitsuyoshi. *The Twilight of the British Literary Ballad in the Eighteenth Century*. Fukuoka: Kyusyu UP, 2001. Print.
- 山中光義『バラッド詩学』, 音羽書房鶴見書店, 2009年

